

ほととぎす

堀  
辰  
雄

われぞげにとけて寐ぬらめやほととぎす

ものおもひまさりこゑとなるらん

### 蜻蛉日記

### その一

「昔、殿のお通いになつていらした源の宰相某なにがしとか申された殿の御女むすめの腹に、お美しい女君が一人いらつしやるそうでございます。その女君なんぞをお引

き取りになられては、如何なものでございましょう？  
なんでも今は、お二人共、兄しやうとに当られる禪師ぜんじの君の  
御世話になられ、志賀の麓ふもとに大層心細いお暮らしを  
なすつて入らつしやるそうでございますが……」

やつと春の立ち返つた或日、そんな事を不意に思い  
出したように年とつた女房の一人が、私の前で話し出  
した。そう、そう言えば、そんな御方の事も聞いてい  
たつけ……と私は以前殿にそういう女の御方もあられ  
た事など、もう殆ど忘れかけようとしていたのを、何  
ということもなしに思い出させられた。——なんでも  
故陽成院こやうじやういんの御後だとか云われる、その宰相がお亡く

なりになって、跡にたった一人の御女むすめばかりがお残

されになった時、そう云う事をお聞きになるとそのま

まにはお聞き過ごしになれない例の御性分から、殿は

その御方を何くれとなくお世話なすつていらしたよ

うだったが（一度などは私のところからもあるたけの

単衣ひとえをその御方の許へお取り寄せになった事もあった

――、そのうちその不為ふしあわ合せな御方は、御自分の本意ほんい

からでもなく、ときおり殿をお通わせになさつていら

れるらしい御様子だった。昔気質むかしがたぎの人らしく、それに

殿よりも少し年上だったりしたので、それまで大ぶお

躊躇ためらいなすつたらしかったが、やはり何かと行末が心

細くお思いなされていた折でもあろうし、そう頼もし  
そうにもない殿をもお頼みになるより外はなかったの  
かと思えば、反つてお気の毒なような位であつた。し  
かし、殿との御仲は、恐らくその御方のお思いなすつ  
たのよりも、ずっと果敢はかないものにちがひなかつた。――

――その後一年と立たないうちに、その御方のところに  
女の御子様がお生まれになつたとか云う事を耳にして、  
或日私がそれをそれとなく殿にお訊ききすると、「そう、  
そんな事もあつたかも知れんな」と殿はいかにも冷淡  
そうに仰おつしやられたぎりだつた。私の前なのでわざと  
そう素知らぬふりをして入らっしゃるばかりでもなさ

そうだった。そして、「どうだ、ひとつお前がその子を  
引き取って育ててやらないか？」などといつも子の少  
いのを歎いていた私に反って挑まれるように仰やられ  
るのを、私は胸を刺されるような思いで聞いていた事  
も、今、ひよつくりと思ひ出す。しかし、そんな一昔  
前の自分と言ったら、只もう自分の不為合せな事ばっ  
かしで胸を一ぱいにしていて、自分のほかにもそんな  
お傷いたわしい御方さえいらつしやる事なんぞ、知らずに  
いられたら知らずにいたい位だった。……

そういう一人よがりな私であつたのに、それがこの  
頃、身も心も衰え出しているとでも云うのか、ときお

り見る夢までが妙に気になってならない程で、行末な  
ども何かと心もとなくて、自分が死んだ跡には道綱だ  
けがただ一人ぎり頼りなく残されることを思うと気が  
かりでならなかった。数年このかた物詣ものもうでなどするに  
つけてもどうかもう一人ぐらい女の子でもお授け下さ  
るようにとお祈りし続けていたが、だんだんそんな望  
も絶えた年頃になり、もうこの上は何処いやからか賤しく  
ない腹の女の子でも引き取って、それを養うよりほか  
はあるまいなどと、誰れかれにともなく私はそんな事  
を言い言いついていたのだった。……

——私は、恐らく殿なんぞにももう忘れられている

かも知れないような、その不遇な少女を自分が引き取つてもいいような事を言うと、私にその話をした女房はすぐ伝<sup>つて</sup>手を求めて問い合わせて呉れたが、その日かげの花のように誰にも知られずにこっそりと大きくなつた少女はもう十二三ぐらいになつてゐるそうだった。そんないたいけな子だけを相手に、その不為合せな御方は、志賀の東の麓に、近江の湖を前に見、志賀の山を後ろにした、寂しい里に、言いようもなく心細く明し暮らして入らっしゃるとかいう事だった。その二人のお身の上をつぶさに聞けば聞くほど、何か私も身につまされて、そう云うお暮らしではさぞその御方



もこの世に思いの残るような事ばかりであろうと思いやられるのだった。

その人の異腹の兄だという、その禅師の君はいま京に住まっておられた。その禅師の君と、その話を持ち出した女房とが昵近じっこんの仲だったのである。で、すぐその禅師の君に話をしに往ってくれたが、「それは何よりな事です。早速志賀の里へ往つて、お話をして参りましょう。どうも世の中があまりに果敢いようなので、いつその事尼にでもさせようかと思つて、あちらへ遣つてあつたのですから——」と云うところよい返事だった。それから二三日後、その禅師の君は志賀の山

を越えて往ってください。たまにしか訪れることのない、そんな異腹の兄がそうやって突然訪れていったのを、その世を侘<sup>わ</sup>びた女は何事かと訝<sup>いぶか</sup>しそうにしていたが、その話を切りだすと、はじめのうちは黙って聞いて、なんとも言わずに只泣いてばかりいたけれど、ようやく口を開いてこう云う返事をした。「わたくしはもうこれぎりの身と思い、自分の事なんぞはどうから諦めておりますが、ただ一しよにいる此娘がこのままではあんまり不便<sup>ふびん</sup>で、なんとか為<sup>し</sup>様はあるまいかと思つて居りました。まあ、そう仰やってくださいる御方がおありなれば、どうぞあなた様のよいようにお極め

なすつて下さいまし……」——そう云うその人の御返事だったという事を、その翌日京へ帰った禪師の君から聞いて、その女房は私のところへ来て、一部始終を繰り返し、「本当に好うございましたこと。そう云う御宿縁でもございましたでしょう。が、何よりもまあ、そのお気の毒な御方のところへ、御文をあなた様から早速差し上げなさらなければ——」と言うのだった。私も先ずそうしたいと思つていたところだったから、その日の夕ぐれ、その志賀の御方のところへ最初のお消息を認めた。したた「かねがねよりあなた様の御ん事は  
お聞き及びしておりましたが、これまではついぞ御消

息も差し上げませんでした。突然、こういう私のよう  
な者からこんな無<sup>ぶし</sup>駄<sup>つけ</sup>なことを申し出されて、まことに  
思いがけなく思し召されたでもありません。うけれど、  
禅師様がわたくしの日頃よりの心細い憂えをそこもと  
へお伝えなさいましたのを心よく御承<sup>おうけ</sup>引き下さいまし  
た由、ほんとうに心から嬉しゅうございました。何か  
と遠慮いたされまする斯<sup>か</sup>かる申<sup>もう</sup>し出<sup>い</sup>ゆえ、ずいぶん躊  
躇もいたしましたけれども、いろいろとそちらの御様  
子などお聞きいたし、若<sup>も</sup>しやそんなおいとしい御子様  
をもお手放しなされはすまいかと思いましたが、ござ  
いますので——」などと心を入れて認めたのであつ

た。

御返事は翌日来た。長い御消息だった。養女の件は「喜んで」などといかにも心よい返事をして下すつたが、その同じ御消息の中に、以前殿とおかたらいになられた日頃の事なんぞを何かと思い出されて細々こまこまと書かれてあつた。自分なんぞの想像以上に不ふ為し合あせであられたらしいお身の上には、何かと胸を打たれるような事のみ多いのだった。「いつのまにやら目の前を霞が一杯い立ちこめましたようで、筆の立所たちどもわかりませず、たいへん見苦しい字になったようでございますけれど——」と最後を結ばれてあるのも、いかにもその御方

らしい真実な感じがあるように思えた。

それから二度ばかりその御方と長い消息をとりかわし、とうとうその少女をわたくしの養女とする事になったので、又禪師ぜんじの君が出向いて往かれて、その少女を志賀の里からともかくも京へ連れて来られたのだった。

その事を聞くと、自分の愛娘まなむすめをそうして京へ出立させて、いよいよ寂しくなられたその御方のお心の中はまあどんなであろうかと、それからそれへと尽きせずお思いやりしていたが、「それにしても、あんなに氣弱もそうな御方をこのように決心させたのも、若もかし

たら殿がその女を御世話くださるような事にでもなり  
はしないかと思われなすったからかも知れない。そう  
思つて入らしたとしたら、私なんぞのところへお寄  
こしになつたつて、殿はこの頃こちらへあまりお見  
えにならないものを」などと、こうしていつまでも殿  
との仲を絶とうとしては絶たれずに中途半端な暮らし  
方をしている意気地のない自分の事が反省せられ、こ  
う云う自分とも知らないで托<sup>たく</sup>せられて来るその少女ま  
でがかわいそうな氣もしたが、それもいまさら詮ない  
事、一旦こうと契つた上はもはや取り返すことは出来  
ないと思われるのだつた。

この十九日が日が良いというので、道綱にその少女を迎えに往つて貰うことにした。出来るだけ目立たぬようにと、只、網代車あじろぐるまの小さっぱりとしたのを用意させて、それに馬に乗った男共を四人、下人を数人だけ附添にした。やがて道綱は、自分の車のうしろにこんどの仲人役の女房を載せて、出かけて往くことになった。

丁度皆の出かけようとしている所へ、殿から珍らしくも御文があつた。何だかこちらへ入らつしやりそうな御様子にも見えるので、きよう殿にいきなりその養女を見られてはしようがない、まあ暫くは知られない



ようにして、なりゆきに任せて置いた方が好いと思うものだから、出来るだけ急いで連れもどるようにと皆に言いつけた。

しかしそうやって急がせた甲斐もなく、それより殿が一足先きに来てしまわれた。まあ、どうしようかしらと思惑っているうちに、やがて皆も帰つて来たようだった。殿は少し不審そうにしていらしたが、道綱が、かりぎぬすがた狩衣姿ではいつて来るのをお認めになると、「大夫はどこへ行つていたのだ？」とお訊ききになった。道綱は、さも困つたような様子で、何かと苦しうに言い紛らしていた。私は側からそれを見るに見かねて、

いずれ一度は殿にも打ち明けなければならない事なのだからと思つて、「実は、私どもの身よりが少くて、あまり心細うございましてので、或る御方に棄てられました子を貰つて参つたのでございます」と言葉のうらに少し皮肉を籠こめながら言つた。

「それは見たいな」と殿はしかし上機嫌そうに仰おつしやつて、それからふと私の顔を見据えるように「一体、誰の子なのだい？」と小声になつて訊かれたが、私が相変らず笑つてゐるような、いないような目つきをしてゐるのに漸やつとお氣がつきになると、急に御自分も目を赫かがやかせられながら、「だが、まさかおれがもう年を

取ったので、代りに若い奴を手に入れて、おれなんぞは追い出そうと言うのじゃあるまいなあ」と言われた。「御目にかけてもよろしゅうございますが——」と私もそれについ釣込まれてほほ笑み出しながら、「——でも、御子様にして下さいますか？」

「いいとも。そうしようではないか。——だが、まあ、どんな奴だか早く見せてくれ」殿はいかにも好奇心をおさえ難そうに急<sup>せ</sup>かせられた。私も私で、まだ一目も見ないその少女が見たくて溜<sup>たま</sup>らなかつたので、すぐにこちらへ来るようにと呼びに遣<sup>は</sup>らせた。

その少女は十二三と聞いていたが、その年にしては

思つたよりも小さくて、まだいかにも子供子供しいた。近くへ呼び寄せて、「立つて御覧」と言うと、素直にすぐ立つて見せたが、身丈みのたけは四尺位で、いかにも姿のよい子で、顔なども本当に可哀らしかった。只、髪だけは、幼少の折からの辛苦がそこにまざまざと見られでもするかのように、大ぶ抜け落ちて、先きの方が削そがれたようになってい、身丈には四寸ばかりも足りなかった。

そういう穉いとけない少女を殿はつくづくと見入つていらつしつたが、「可哀らしい子じゃないか。一体、誰の子なのだ？」とあらためて私の顔を見据えられた。

「本当にお可哀いとお思いなされます？」と私は言いながら、「では、お明かししてもよろしゅうございますけれど——」と静かにほほ笑んでいた。

殿はどうとうこらえ兼ねたように言われた。「早く教えてくれ」

「まあ、おうるさいこと」私は急にすげなさそうに言つた。「まだお分かりになりませんか？　あなたの御子様ではありませんか」

「何、おれの子だって？」殿は側で見ているのもお気の毒な位、おあわてなすつた。「それはどういうのだ、何処のだ？」

私はしかし、相変らず、冷やかにほほ笑んでいるぎりだった。

「いつかお前に貰ってやらないかと言った、あの子か？」殿はそれを半ば御自分に向って問われるように問われた。

「さあ、その御子様かも知れませんが……」

殿は、そういう私には構わず、一層しげしげとその少女を見入られていた。「やはりあいつらしい。——だが、あいつがこんなに大きくなつて居ようなどとは夢にも思わなかった事だ。いまごろ何処をうらぶれていることだろうか、ときおり急に気になり出すと、

もう矢も楯も溜らない位だったが……」そう云う御声はだんだん震え出してさえいられた。

少女はそこに泣き伏していた。それを見ていた側近の者共も、そんな物語にでも出て来そうな奇しい邂逅には泣かされない者はいないらしかった。——そういう裡でも私だけは、まるで涙ももう涸れてしまったとでも云うように、そしてそんな自分自身をも冷やかに笑っているより外はないかのように見えた。

やがて、殿が何度となく単衣の袖を引き出されては御目を拭われていらつしやるのを、私は珍らしい物でも見るようにそのまま眺めていたが、それから漸つと

言った。「もうお歩行あるきのついでにもお立ち寄りにならなくなつたような私なんぞの所へ、こんなに可哀らしい子が参りましたけれど、これからはどう遊ばします？」

暫く殿はなんともお返事なさらずにいた。が、ようやく顔をお上げになつた時は、もういつものように私に挑むように目を赫かせていらした。そして殿は「いつその事おれのところへ連れて往こう。——なあ、小さいの」と言いながら、少女の方へふり向かれた。少女はどうしてよいか分からず、いかにも当惑しきつたように、しかし顔だけはあでやかにほほ笑んで見せ



ていた。……

翌朝、殿は少女を又お呼び寄せになって、髪などをしきりに撫でておられた。そうしてお帰りぎわに、「さあ、これからおれの所へ一しよに往くんだよ。いま、車をこちらへ寄せさすから、そうしたらさつさとお乗り」などとそんな小さな子にまでからかに揶揄からかわれていらした。少女はただもう困ったように袖を顔にしていた。殿はそういう少女の可憐な様子を、心残りそうにかえり見られがちに、帰って往かれた。

それから御文を寄こされる度毎に、端にきまつて「撫、子は、どうしているか」などとお書き添えになられ

るのだった。「山賤やまがつの垣は荒るとも」などと云う古歌を思い出されてか、そんな撫子なでしこなんぞとあわれな名をいつのまにかお附けになつていられるのも、本当に心憎いほどなお思いやりなこと。あいにくそれから殿も御物忌おもものいみつづき、こちらも何かと物忌がちで、殆ど門も鎖とぎしたぎりなものだから、入らつしやろうにも入らつしやれず、そういう御文を毎日のように、門の下から差し入れさせて往かれるのも、それだけでもまあ大層なお心變りのように見える。

それから十数日ばかり立つた或日の未ひつじの刻頃、「殿

がお見えです」と言い騒いで、俄かに中門を押し開け  
なぞしているところへ、車ごとお這入りになつて来ら  
れた。

車の傍に男共が数人寄つていつて、轅をおさえな  
がら、簾をまき上げると、中から殿はお降りになられ  
て、いきなり「綺麗だなあ」と仰やりながら、いまを  
盛りと咲いている紅梅を見上げ見上げ、その下を徐か  
にお歩きになつて入らした。

そしていつになく上機嫌そうにして入らしたが、  
あいにくあすは方塞りになつてゐる事を申し上げる  
と、「そんならそうと、なぜ先に知らせて置いて呉れな

かった」といかにも不満そうに仰やられた。「若し<sup>も</sup>そうお知らせして置きましたら、どうなさいました？」と私はつい言わなくともいいのに言いかえした。「むろん方<sup>かたち</sup>違えをして来たさ」と殿も殿で、あんまり見え透いたような事を仰やるものだから、こんどは私も少しばかり気色を顔に出して、「それほどのお氣持がありませんかどうか、今後に試めさせていただきませう」と応じた。

そんな小さな事から、又いつものように不和が高じそうになって来たので、殿はすこし氣むずかしい顔をなすっていられたが、やがてこないだの少女が呼ばれ

て来ると、やっと又上機嫌になられて、側にお呼び寄せになり、髪などを撫でられながら、「この子には手習や歌なんぞよく仕込んでやってくれ。そういう事は、お前になら任せて置けるからな。——まあ、もうすこうししたら、向うの家の奴なんぞと一しよに裳着もぎの祝をしてやろうよ」などと愉たのしそうに御相手をせられていた。そのうち日が暮れ出したので、「おなじ事なら院へ参ろう」と言い出され、又皆を騒がせて車にお乗りになり、帰って往かれた。

殿をお見送りした後、一人ぎりになって、私はそのままいつまでもその暮れようとしている庭面にわもをぼんや

りと見入っていた。一種言うに言われないほどの好い匂が、ときおりその夕闇のなかに立つて、それがまだ驚なんぞを寐つかせないでいるらしい。西の対あたりから、それに雑つて、つい今しがた少女の習い出したらしい琴の幼い調べが途絶えがちに聴えて来る。――

私はふとこんな美しい春の夕をさえあの御方はまあ山里にお一人でどうして入らつしやるだろうかと思ひやつた。あたりのいかにも充ち足りたような、懶い位の、和やかさが、反つてそういう悲しみの多い人のお気の毒な身の上を、その一々の悲しみをまで、残酷なほど鮮かに、生々と私に描かせていた……

この春は、祭や物詣ものもうでなどにその少女が珍らしがつて往きたそうにしているので、そう若いものばかりだけを出してやることも出来ないのも、私も連れ立って一しよに出かける事もつい多かつた。

しかし又春の末からは何かと物忌が重なり、家に閉とじ籠こもりがちだったけれど、去年までは家の柱などに御守札などを押し付けてあったりするのを目に入れると、この夢ほども惜しいと思われない生をさも惜しんでいるかのような気がされて、自分らしくない事だと心苦しかったが、今年はどういうものか、そう云う

厄除けやくよのようなものすら無関心に見過ごされ、何事も  
ないように静かに忌にこもっていられるようになった。  
それもこの少女のために気が紛まぎれるのかと思って、私  
は毎日のようにその少女を相手に歌を詠んだり、手習  
をさせたりしていた。

殿もこの頃は物忌がちなので、お泊りになることは  
少ないが、よく昼間などお見えになる。そんな昼なん  
ぞ、もう自分の老いかかった姿を見られるのは羞はづかし  
いようだが、どうにも為様しやうがないので、少女を自分の  
側から離さぬようにして物語のお相手などしているが、  
いつも派手好みで、匂うような桜がさねの、綾模あやもよう様の



こぼれそうな位なのを着付けていらつしやる殿にむか対つ  
ていると、いまさらのように自分の打ちとけて、萎しおた  
れたようなりをした姿がかえり見られ、可哀いさか  
りのこの撫子のために、こうしてわざわざ入らつしや  
ればこそ、さぞ自分は殿には見とうもなく思われたろ  
うと悔やまれがちだった。

あおいまつり

葵祭が近づいた。その日になると、私は若い人た  
ちを連れて、忍んで出掛けていった。暫く祭の行列を  
見物しているうちに、なかでも一きわ花やかに先払い  
させながらやってくる御車があつたので、どなたかし  
らと思つて注意をして見ていると、その前駆の者共の

なかに幾人も見馴れた顔があつた。「矢つ張、殿だ」と  
思いながらも、自分達の車のまわりで「あれはどなた  
様でしょうか……いままでの中でも一番御立派なよう  
だ……」などと人々がざわめいているのをそれとなく  
耳に入れていると、こうして忍んだ姿で来ている自分  
達が一層みすばらしいような気がされてきてならな  
かつた。簾をすつかり捲き上げられたまま、きらびや  
かにお通り過ぎになつて往かれたが、車上の人はまぎ  
れようもなく、あの方だった。――が、まあ何という  
ことか、あの方はすぐ目の前をお通り過ぎになられな  
がら、その瞬間私達の車をお認めになられたかと思う

と、ふいと扇で顔をお隠しになられて、そのまま其処を通り過ぎて往かれてしまったのだった。

車の奥ぶかくに自分と一しよにいた撫子にもそれは気がついたにちがいはなかった。私がそれについては何んとも言わずに黙っていると、少女も心もち蒼いような顔をしながら、しかし車上の殿なんぞは見もしなかったような風をしていた。その少し蒼ざめた顔色は、家に帰るまで、直らなかつた……

夕方、そんな事が知らず識らずの裡に帰りを早めた私達の車よりか、ずっと遅くなつてから、道綱の車が歸つてきた。

なんでもその祭の帰りぎわ、混雑をきわめた知足院のあたりで道綱の車は一台の小ざっぱりとした女車のうしろに続き出したので、そのままその跡を離れぬようにして附けて往くと、向うでもそれに気がついたらしく、家を知らせまいとするのであろうか、ずんずん車を早めて他の車の間に紛れ込もうとするのを、とうとう最後まで附けて往って、その女の家（大和守の女むすめだとか……）をつきとめて来たとか云う話だった。――

―その小さな冒険は、内気一方に見える道綱にも少からず氣に入っただけだった。そうしてその跡を附けて往った車の若い女のことを、その姿を見もしないのに、

何んとなく懐しく思い初めているように見えた。

あくる日になって、何を思われたか、殿から御文を  
寄こされた。しかし、きのうの出会いには一切お触れに  
なっていなかった。私はその返事の端にすこし拗ねた  
ように、「きのうは大層まばゆいばかりのお出立いでたちだつ  
たと皆が申しておりますが、どうして私達にだけはお  
見せ下さらなかったのですか。本当に若々しいなされ  
方でしたこと」と書いてやったら、すぐ折り返し、「あ  
れはおれの姿が老いぼれていて羞しさのあまりにした  
事なのだ。それをまた、けばけばしい姿なんぞと誰が  
言っているのか」などと書いて来られたが、よくもま

あそんな空々しい事が仰そらぞらやれたもの。

そんな葵祭あおいまつりが過ぎてから、殿は又かき絶えたように入らつしやらなくなつた。

道綱は、この頃、しきりに例の大和守の女むすめの許もとへ文をやつては、内気な子だから、女の方の返事の思わしくないのを、一人でもどかしく思っているらしい。私にはまだ何も打ち明けてくれないので、こちらも何も言わずに見ているよりしようがない。日ねもす何か憂わしげな様子で庭面にわもなど眺めながら暮らしているかと思うと、次ぎの日は小弓の遊びなどに出かけて往つて、

きようは上手に射たなどと帰つて来るなりその日の模様をはいで皆に話したりするのだつた。

撫子の方はまた撫子で、ようやく世の中と言うものが分かりかけて来た少女らしく、あれから何か私に氣を置いて、つとめて顔をさえ見合わせないようになっている。小さい心に過ぎていろいろ思っている事もあるうかと、いたいたしいような位。——私はもうこのまま殿がいつお絶えになろうとも、自分自身は思い残すような事もありあるまいと思われたが、只、こうしていろいろな夢をいだいて私のところにやつて来たでもあろう撫子がまあどんなに胸の潰れるつぶような思いを

する事だろうと、その事のみが気づかわれるのだった。

もう梅雨<sup>つゆ</sup>ちかいそんな或日、突然殿があ祭の日からはじめてお見えになられた。私が空<sup>うつ</sup>けたような顔ばかりして、いつまでも物を言わずにいと、「どうして何も言わないのだ」と、殿は私の機嫌をとるように言い出された。「何も言うことがございませんので——」

と私が思わず生返事をする、殿は急にこらえ兼ねられたようにお声を荒らげて、「どうしてお前は、来てくれない、憎い、悔やしいと、おれを打つなり抓<sup>つか</sup>るなりしないのだ」などとお言い続けになった。私はしばらく打ち伏したまま無言で聞いていたが、稍<sup>やや</sup>たつてから、



やっと顔をもたげ、「わたくしの方で実は申し上げた  
かった事を、そのように何もかも御自分で仰おつしやられ  
てしまいましたので、もう私の申し上げたい事はなく  
なりました」と言いながら、私はいつか自分がいか  
にも気味よげにほほ笑みだしているのを感じていた。

その日はそうやって一日中、二人共、むつつりとし  
合むかったままで対あい合あっていた。殿は撫子を呼びにやら  
れたが、撫子までがきようは気分が悪いと言つてとう  
とう出て来なかつた。殿はますます苦々しげな御顔を  
なすつて入らしたが、それでも何かがお心残りのよ  
うにすぐにはお立ちにもならず、日暮れ近く、漸ようやくお

歸りになつて往かれた。

しばらく此日記を附けずにいた。みずから進んでそれを附けたいような氣にもならず、又、それを附けずにいることが氣にもならなかつたので、そのまま放つておいたのである。もともと、ながらく途絶えていた此日記を再び何んと云うこともなしにこの頃附けはじめていたのは、前のように自分で自分を何んとかしなければならぬと言つた、切迫した氣持なんぞからではなかつた。只、あれほど自分の事だけでぎりぎり一ぱいになつていた私が、こうしてあの方に棄てられた

女の子を養うような余裕のある心もちにまでなり出したのが自分にも不思議な位で、それで筆をとり出したのだが、矢つ張、此日記を私に書かせたものは、あの方への、又、自分自身への一種の意地であつたかも知れぬ。しかし、そういう気もちもだんだん無くなりかかっている現在、その日記がこうして終るともなく終ろうとしているのも当然であるのだろう。此日記にいつかまた別の弾んだ心で向えるような日の来るまで、しばらくそれを仕舞っておくため、私はいま、この物憂い筆をとっていると言えようか。

ここ数日、雲のたたずまいが陰しく、雨が思い出し

たように降ったり歇やんだりするような日が続いている。  
この頃はよく明け方なんぞに時鳥ほととぎすが啼ないているらし  
く、女房の一人が「ゆうべ聞いた」などと言うと、他  
の女房がすぐそれに応じて「けさも啼ないていた」など  
と話し合っているが、人もあろうに、この私がまだこ  
の夏は一度もそれを聞かないなんぞと言うのは羞はかし  
いような気がする程。——それほど、この頃はどうか云  
うものか我にもなくぐつすりと寐ねてばかりいる自分を  
かえり見て、私は皆の前では何も言わずにいたけれど、  
心のうちではひそかに「自分はいくらぐつすり寐ねてい  
たって、本当に打ち解けて寐ねているわけではないのだ。

恐らくこの頃私自身にさえ見向きもされなくなつてしまつた私の物思いが、毎夜のように自分の裡うちから抜け出して、時鳥となり、あちらこちらを啼き渡つているのだらう」などと考え考え、そんな負けず嫌いな氣もちを歌によんだりして、纔わずかに悶やを遣つていた。しかし、それを誰に見せようでもなく、私はそこいらの紙に書き散らしては、それがそのまま失せるもよいと思つていた。……

もう一年余も披ひらかなかつた此日記を取り出して、それにまだこう云う氣もちではついぞこれまで向つた事もないようにさえ見える、心のときめきを感じながら、いま、夜の更けるのも私は知らずにいる。自分にとつて附けても附けなくとも好いようなものになりかかつていた此日記を、再びこんな切ない心もちで手にとる事があるうとは、夢にも思わなかつた事である。

頭かんの君きみがお立ち去りになつて往かれたのは、もう余程前のことであらう。その跡、私はながいこと、灯を

そむけたまま、薄暗いなかに、ひとり目をつむっていた。いつまでもそうしながら、自分でも何をとほつきりと分らないようなものを考えて追いつけていた。そしてその自分でもはつきりとは分からないもののために自分の心が切ないほど揺らいでいるのを、私もまた切なくそれを揺らぐがままにさせていた。……

暫くしてから、私は観念したように閉じていた目を、やっと見ひらき、出来るだけ心を落着けるようにして、自分の前にこの日記を置いた。

一生受領ずりようだった父が、私のためにいろいろと気づ

かつて呉れて、私達をいまの中川のほとりの住居に移らせて下すつたのは、去年の秋の半ば頃だった。殿が私のためにあてがって下すつていた、これまでの家はますます荒れ放題に荒れてきて、もう住み難いばかりになっているとは言え、父の勧告に従つて其家を去つてしまえば、同時に殿との間もこちらから絶やすも同様になるので、最近わざわざ志賀の里から引きとつたばかりの養女の事など考え、さすがにそれを自分ひとりでは決し兼ねて、まあそう言えば殿の方でどうお出でになるだろうか、それとなくその移居の事をほのめかすように殿にお伝えして置いたのだった。けれど



も、殿からはその事については何んとも御返事がないばかりか、この頃は例の近江とかいう女の許へばかり繁々とお通いになって入らつしやると云うお噂を耳にしたので、私はいよいよもうこれまでと思い、殿にはなんともお断りせずに、父の言うとおりに中川の家に移つたのだつた。大層山近く、河原に沿うた、ささやかな家で、本当にこんなところにこそ住いたいと年頃思つていたような住いであつた。——其処へ移つてからなお二三日は、殿はまだそれをお知りになつた様子もなかった。ようやく五六日立つてから、「どうしておれに知らせてくれなかつたのだ」と御文を申し訣もうわけの

ように寄こされた。「お知らせいたそうかとも思いましたが、こちらはあんまり片寄った処でございますので。本当に、せめてもう一度なりと、旧の処<sup>もと</sup>でお会いいたしとうございました」と私が氣強くすっかりもう仲の絶えたようにして返事を差し上げると、殿の方でもお怒りになったかのように、「そうか、そんな不便な処ではおれには往かれそうもない」と言つて寄こされたりだつた。それからその儘<sup>まま</sup>、私達はとうとう仲が絶えた形になつた。

九月、十月とたち、早朝など薶<sup>しとみ</sup>を上げて見出すと、川霧が一めに立ちこめていて、山々は麓<sup>ふもと</sup>すら見え

ないようなこともあつた。それほど寂しい、それほど  
佗<sup>わび</sup>しい住居に自分自身を見出すのが、私にはせめても  
の気休めになつた。その川を前にして果てしもなく抔  
がつている田の面には、ところどころに稲束<sup>いなたば</sup>が刈り干  
されていた。たまたま私達の許<sup>もと</sup>に訪れて来るような人  
でもあると、その青稲をそのまま馬に飼つてやってい  
るのも、いかにもあわれが深かつた。小鷹狩が好きな  
ので、ときおり野へ出ては鷹を舞い上がらせたりして  
いるものの、こんなところでもつて一緒に暮らすよう  
になつた道綱は、まだ若いだけ、何んだかすべてが物  
足らなさそうに見えた。

そのままやがて冬になろうという頃、こちらではもうすっかり仲の絶えた気でいた殿の許から、突然、冬の着物を使いの者に持って来させて、これを仕立ててくれなどと言って来られた。「御文もありましたが、途中に落して来てしまいました」と使いの者がしきりに言い<sup>い</sup>訣<sup>わけ</sup>をしていたが、最初からそんなものはお持たせにならなかつたのだろうと思われた。私はもう意地を立てとおす気もなく、言われるなりにそれを仕立てて、こちらからも文を附けずに送って差し上げた。その後、そんな事が二度も三度も続いてあつた。なかなか仲が絶えそうで絶えないのが気になったが、それも

まあこんな縫物位のためではと、私達の果敢はかなかった仲がいまさらのように思い返されたりしているうちに、その年も暮れたのだった。

ながいこと大夫たいふの位より昇進しなかった道綱が、ようやく右馬助うまのすけに叙せられたのは、その翌年しもくの除目の折だった。殿からも珍らしくお喜びの御文を下さったりした。今度の昇進はよっぽど道綱も嬉しいと見え、いそいそとして其処此処御礼まわりなどに歩いていたが、その寮つかさ（右馬寮）の長官が丁度道綱には叔父にあたる御方なので、其処へも或日お伺いすると、まだお若いその御方は非常に歓よろこばれて、よもやまな物語の末、何

処からお聞きになつて知つていらしたのか、私の手許に養つてゐる撫子の事を何くれとなくお問いになり、「御いくつになられました？」などと熱心に訊きかれたそうだった。帰つて来てから、道綱が私にその事を話して聞かせたが、私は「まあ、いくらお好色すきな方だつて、こんな撫子を御覧になつたら——」と答えたぎり、なんとも気にはとめなかつた。

撫子は去年志賀の里から私の許に引き取られてきた頃から見れば、だいぶ大人寂おとなさびた美しさも具え出して来てはいる。そして幼少の折からいろいろ苦勞をして来たせいか、年の割には世の中の事は何もかも分かる

ようで、私の前なんぞでは山里に一人侘しく暮らしている母の事などを少しも恋しそうにはしない位、——だが、身体つきなどはまだ細々としていて、全体に何処となく子供子供している。初事<sup>ういごと</sup>などはまだ遠そうである。——そういう誰の目にもつきそうもない小さな草花のように生い立っているこの少女を、まあその御方は何処からお聞きつけになって、もうそれに御目をかけられようとしているのだろう。……

右馬頭<sup>うまのかみ</sup>はその寮で道綱にお出合いなさると、話のついでにかならず撫子について同じような事を繰り返し

お尋ねになるらしかった。最初は道綱も気になる見え、逐一それを報告していたが、私の方で一向取り合おうとしなかったので、しまいにはもう私には何も聞かせないようになった。ところが、或日、夜更けてから帰って来るなり、もう私の寐ねているところへ這入ってきて、「実はきょうお父う様にお目にかかりましたら、お前の寮の頭がこの頃おれをしきりに責めるのだが、お前のところの撫子はどうしているな、もう大ぶ大きくなったろう、などと仰おつしやつておりました。それから寮で、頭かんの君きみにお逢いしましたら、殿から何かそなたに仰せにはなりませんでしたか、と訊かれたので、



その通りにお答えしますと、頭の君はそれをどうお取りになられたのか、それでは明後日が好い日だから御文を差し上げたい、などと私に言われるのです。私は何んとも御返事いたさずに参りましたが——」と生真面目な道綱はさも困った事になつてしまつたようにそれを話すのだった。私はそれを一通り聞くと、「まあ本当に何を勘ちがいなすつて入らつしやるのでしょうね。まだ撫子がこんなに小さいとは御存知ないからなのでしょよう」などと事もなげに返事をして、心配さうな道綱を去らせた。そうして私もその夜はそのまま寝た。

さて、その日になると、矢つ張、頭の君から御文があつた。「日頃からわたくしの思つております事を殿にお頼みいたしておきましたが——」などと丁寧に書いて、殿からそちらへ自分で文を差し上げよと言われましてので、こうやつて消息をしたた認めましたと言つて来たのだつた。私はそれを受け取つて、まあ頭の君も撫子がこんなに穉い事わさながお分りになりさえすればと、おかしい位に思つて、さしあたり返事はどうしようかと迷つていたが、いつその事この手紙を殿のところに持たせてやつて何んと仰やるか聞いて来させようと思つた。が、御物忌おもものいみやら何やらでなかなかそれを殿

に御目にかける事が出来ないでいるらしかった。一方、頭の君は頭の君で、こちらの返事のいつまでもないのをしきりに怨<sup>うら</sup>んで入らっしゃるらしかった。仲に立つて、道綱は一人で殆ど困っていた。ようやく殿の御返事のあつたのを見ると、「おれがどうしてそんな事をまだ許すものか。そのうち考えて置こう、と右馬頭には言つて遣つただけだ。返事はお前が好いように取<sup>とり</sup>做<sup>な</sup>せ。そんな姫のいる事さえ誰もまだ知つてはいない位だのに、若<sup>も</sup>しそんな右馬頭でもそちらに通つたりしてみろ、お前がおかしく思われてもしようがないぞ」といかにも心外な事らしく仰やつて来られた。そんな事

を言われれば、こちらだつて腹が立つ。その腹いせの  
ように、私はつい大人げなく頭の君にも「ちよつと殿  
の許に使いを遣りましたら、まるで唐土もろこしにでも行つた  
ように長いことかかつて、漸ようやく御返事をいただいて  
参りました。しかしそれを見ますと、ますます私には  
分かり兼ねる事ばかりなので、何んとも返事のいたし  
ようがございませぬ」と手きびしい返事を書いてやつ  
た。そんな風にいつになく腹を立てた後で、ふと気が  
つくと、なんでもない事だろうと思つているうちに、  
急にすべての事がなんだか思いもよらない方へ往つて  
しまいそんな危惧きぐが、其処には感じられないでもな

かった。私はそれを感じると、何がなし心の引き締まるような気もちがした。——そんなこちらの冷めたい返事にも、私の惧おそれたとおり、頭の君はすこしもお懲りにならず、それどころか反って熱心に同じような御文をお寄こしになり出したのだった。もうそうになると、こちらではなるべくそれに取り合わないようにしているよりしうがなかった。

ところが、三月になり、或日の昼頃「右馬頭様がお出になりました」と言うことだった。突然だったのでびっくりしたが、私はすぐざわめき立った女房たちに

「まあ静かにしてお出<sup>いで</sup>」とたしなめ、それを取次いだものには「好いから、いま、私達は留守だとお答えなさい」と言いつけた。

が、そうこうしているうちに、一人の品のいい青年が中庭からお這入りになつていらしつて、目の疎<sup>あら</sup>い籬<sup>まがき</sup>の前にお立ち止まりになられたのが簾<sup>みす</sup>ごしに認められた。練衣<sup>ねりぞ</sup>を下に着て、柔かそうな直衣<sup>のうし</sup>をふんわりと掛け、太刀<sup>たち</sup>を佩<sup>は</sup>いたまま、紅色の扇のすこし乱れたのを手にもてあそんでいらしたが、丁度風が立つて、その冠の纓<sup>えい</sup>が心もち吹き上げられたのを、そのままになさりながら、じつとお立ちになつて入らつしやる様

子はまるで絵に描かれたようだった。

「まあ綺麗な方がいらっしやること」奥の女房たちは、まだなんにも知らずに、裳<sup>も</sup>なども打ち解けた姿のまま、そんな事を囁<sup>ささや</sup>き合つて、簾<sup>みす</sup>ごしにその青年を見ようとしてゐるしかつた。折から、その青年の纓<sup>えい</sup>を吹き上げていた風が、其処まで届いて、急にその簾をうちそとへ吹き煽<sup>ふ</sup>つたものだから、簾のかけにいた女房どもはあれよと言つて、それをおさえようとして騒ぎ出してゐた。恐らくその青年に、そのしどけない姿を残らず見られたらうと思つて、私は死ぬほど羞<sup>はず</sup>かしい思ひをしてゐた。

ゆうべ夜更けて歸つてきた道綱がまだ寐ねていたので、それを起しに往つてゐる間の、それは出来事だった。道綱はやつとそのとき起きてきて、「生憎あいにくきようはみんな留守でして——」などと頭かんの君きみに言つていた。風がひどく吹いていた日だったので、先刻から南面の蔭しとみをすっかり下ろさせてあつたので、それが丁度いい口実になった。

頭の君はそれでも強いて縁に上がられて、「まあ、円座わろうだでも拝借して、しばらくここに坐らせて下さい」など言いながら、其処で道綱を相手にしばらく物語られていたが、「きようは日が好かつたので、ほんの真似



事にでもこうして居い初そめさせていたいただきました。これだけで帰るのはいかにも残念ですが——」と、すこし打ち萎しおれた様子で、お帰りになつて往かれた。

「思つたよりも品の好きそうな御方だこと」そんな事を思いながら、私は簾しほごしにその後姿をいつまでも見送つていた。

それから二日程してから、頭の君は私のところへ留守中にお伺いした詫わびなどを言いがてら、「本当にあなた様にだけでもお目にかかつて、わたくしの真実な気もちをお訴えしたいのですが、自分の老いしやがれ

た声などどうしてお聞かせ出来よう、などといつも仰せられて私をお避けになるのは、それはほんの口実で、まだ私をお許し下さらぬからだと思われます」などと怨<sup>うら</sup>んでよこし「まあ、それはともかく、今夜あたりまた助<sup>すけ</sup>にだけでもお目にかかりに参りましょう」と言つてきた。暮れ方、頭の君はお言葉どおりお見えになられた。しようながないので、ともかくも蔀<sup>ひさし</sup>を二間ほど押し上げ、縁に灯をともして、庇<sup>ひさし</sup>の間にお通しさせる事にした。道綱が出て往つて、「さあ、どうぞ」と言つて、妻戸をあけ、「こちらから——」と促すと、頭の君はそちらへちよつと歩みかけられたが、急に思い返したよ

うに後退あとずさつて、「お母あ様にここへはいるお許しを願つて下さいませんか」と小声で押問答していた。やがて道綱が私のところに來て、それを取り次いだので「そんな端近くでも構いませんでしたら——」と返事をさせた。頭の君はその返事を聞くと、少しお笑いになりながら、もの静かに衣きぬずれの音をさせて、妻戸からおはいりになつて來られた。

ときおり向うの庇の間から、頭の君と道綱とが小声で取交わしている話し声に雑まじつて、笏しやくに扇の打ちあたる音が微かに聞えてくる。私どものいる簾の中は、物音ひとつ立てず、しいんと静まり返っていた。それ

から稍ややあつて、頭の君はまた道綱に取り次がせて、私に「こないだはお目にかかれずに帰りましたので、又お伺いいたしました」と言つてよこした。そうやつて何度も間に立たされている道綱が「早く何んとか言つて上げませんか」としきりに私を責めるので、私はしょうことなくて几帳きちようの方へ少しいざり寄つては見たものの、勿論、私の方から何も言い出すことはないのです、そのまま無言でいた。頭の君はいざとなつて、私に何んと言つたらよいのか、当惑なすつて入らつしやるよな様子だった。なお、そのままにしていたら二人の間がいよいよ気づまりになつて行きそうだったので、

自分がそこにいる事を頭の君が或はまだお気づきにならないのかも知れぬと思つて自分がそうしたようにお取りになればいいと、私は少し咳払いをした。ようやくと頭の君は口を切つた。

志賀の里から誰にも知らさないようにしてこつそりと私の許に引きとられた少女の事をひそかに聞き、その物語めいた身の上に何んと云うこともなしに心を惹かれて<sup>ひ</sup>いるうちに、だんだんその未知の少女の事を心に沁<sup>し</sup>みて思いつめるようになったなりゆきを、最初は妙に取り繕つたような声だったが、次第に熱を帯びた声になって、頭の君は語り出されたのであつた。私は

そういう頭の君の話をはじめから仕舞いまで、それに  
思いがけない好意さえもちながら、黙って聞いていた  
が、<sup>ようや</sup>漸くそれを<sup>き</sup>聞き<sup>おわ</sup>畢り、こんどは自分が何か言わな  
ければならない番になったけれど、やはり何んとして  
も私は「何を申そうにもまだ姫は大へん<sup>おさな</sup>穉いので、そ  
う<sup>おっし</sup>仰やられるとまるで夢みたいな気がいたす程です  
から——」とお答えしているより外はなかった。

それは雨が乱れがちに降っている暮れがただった。  
あたり一めんを<sup>おお</sup>掩うように蛙の声が啼<sup>な</sup>き<sup>わた</sup>渡っていた。  
そのまま夜が更けてゆくようなので、さつきから庇の  
間に坐られたぎり、一向お帰りなさろうとする様子も

見えない頭の君に向い、「こんなに蛙が啼いて、こうして奥の方にいる私もでさえ何んだか心細い位ですのに。あなた様も早くお帰りになつては」と私は半ばいたわるように、半ばたしなめるように言った。

頭の君の方では、そういう私の言葉をも反つて身に沁むようにしていて、只「そういうお心細いような折こそ、どうぞこれからは私を頼りになすつて戴きたいものです。そんなものなんぞ、私は少しもこわがりはいたしませんから——」と応<sup>い</sup>えるばかりで、いつまで立つてもお帰りなさろうとはしないように見えた。だんだん夜も更けて来るようだし、皆の手前もあるので

私は一人で困ってしまっていたが、それぎり物も言わずにいます、とうとう頭の君はお帰りなさるらしい氣配を見せて、「助<sup>すけ</sup>の君<sup>きみ</sup>の御祓<sup>おはらい</sup>ももう間近かでお忙しいようですから、何か御用がおありになれば代りに私にお言いつけなすつて下さい。これからは度々お伺いたす積りです」と言い残しながら、漸<sup>や</sup>つとお立ち上がりになつた。

私は何気なしにその後姿を見ようと思つて、ふと几帳の垂れをかき分けながらいま見をすると、いま、頭の君のいらした縁の灯はもうさつきから消えていたらしかつた。私の座の近くにはまだ灯がともつてい



たものだから、それには少しも気がつかずにいたのである。それではさつきから闇の中で黙って頭の君は私の影を御覧になつていたのかと驚いて、私はあまりと言えばあまりな頭の君を「まあ、お人の悪い。灯のお消えになつてゐるのを仰やりもしないで——」と鋭くたしなめるように言い放つた。頭の君はしかし、それが聞えなかつたやうなふりをなすつて、黙つたまま立ち上がつて往かれた。

私はその跡、自分の近くの灯をそむけて、薄暗いなかにひとりそのままじつと目をつむっていた。そして私はその目のうちに、自分自身のこうしている姿を、

ついいましがた頭の君に偷見ぬすみみせられていたでもあろう  
ような影として、何んと云うこともなく、蘇よみがえらせてい  
た。それは半ば老いて醜く、半ばまだ何処やらに若い  
ときの美しさを残していた。そうしているうちに、私  
がだんだん何とも云えず不安な、悔やしいような心も  
ちに駆りやられていったのは、そういう自分の影がい  
つまでも自分の裡うちに消えずにいるためばかりではな  
かった。それはさつきあんなに狼狽ろうばいを見せて頭の君を  
たしなめたときの、自分自身を裏切った、自分の噁しゃがれ  
た声がまだそこいらにそのままそっくりと漂っている  
ような感じのし出して来たためだった。

私はそういう一見何んでもないように見える事のた  
めに、思いがけないほど自分の心が揺らぎ出している  
のを、しようことなく揺らぐがままにさせていた。：

### その三

頭<sup>かん</sup>の君<sup>きみ</sup>はそんな事があつてからも、私がそれをそれ  
ほど苦にしていようと夢にもお知りなさない風に、

相変らず、何かと道綱のところに来られては、撫子の事で同じようなことのみ道綱を仲にして私に言ってお寄こしになっていた。

私も、さりげない風をして、「姫はまだ小さいから——」と同じような返事ばかり繰り返させていた。それに丁度道綱がこんどの賀茂祭の御祓おはらいには使者に立つ事になっていたので、何かとその支度をしてやらなければならぬので、私はそれをいい事にその方にばかり心を向け出していた。自然、撫子の事やなんぞで何んのかのと私をお苦しめになられる、頭の君の上からは心をそらせがちだった。——頭の君も頭の君で、毎日

のように、役所の往き帰りに道綱のところに立ち寄られては、何かと先輩らしく世話を焼きながら、御自身は御祓の果てる日を空しく待たれているらしかった。

ところが或日、道綱は、往来で犬の死骸を見かけたと言つて出先きから戻つて来た。そうやって、その身の穢<sup>けが</sup>れた上は、御祓の使者は辞さなければならなかった。一方、道綱がそうして忌<sup>いみ</sup>にこもり出すと、頭の君はこんどは又役所の用事にかこつけては、前よりも一層繁々とお立ち寄りになり、いつまでも上がり込まれて、あれから頭の君がいくら入らしてもお会いしない事になっている私に何んともしてもう一度会えるよ

うな機会をお求めになつて入らつしやるらしかった。

人の好い道綱は、そんな私達の楔くさびになつてゐるのを苦にして何かと責め好い私の方ばかりを責めるのだつた。そうなると、皆の手前も、私はあんまり自分だけが強情にしているように見えるのも何んだから、いつその事なりゆきを自分でない他のものにすつかり任せるような気もちになつて、道綱を再び殿もとの許へ使いに遣ふことにした。ことによると又殿が前のようにその事で何んとかかとか私をお意地めなさりはすまいかとも思われたが、そうされたらばされたで又その時次第の気もちで頭の君の方へも今の自分には言われな

い事も言われようと氣構えしていたところ、殿はこんどはひどく御機嫌好きそうに、「そんなに右馬頭うまのかみが熱心にいうのなら、八月頃にでも許してやると好い。それまで心変りせぬようだったら」などと言って寄こされた。それは思いがけなかったが、しかし八月頃と聞いて、私は何んとなくほつとした。まだその八月までには大ぶ間がある、それまでに何かその殿の一言で決せられた運命から撫子をまぬがれしめるような事がなぜか知ら起りそうな予覚が私にしないこともないからであつた。「八月まで待てとはまあ何んという待遠しさでしょう」頭の君もそれと同じような予覚からか、

殿の御返事をお告げすると、あたかも私を怨む<sup>うら</sup>ように  
言つて来られた。「せめて五月にでもなつたらと思つ  
て居りましたのに。——せつかく私のところへ来か  
かっているように見える時鳥<sup>ほととぎす</sup>も、あんまり不運な私  
を厭<sup>いと</sup>うて、このまま立ち寄りもせず、私から去つて  
往つてしまうような気がいたされてなりませぬ」しか  
し、どうして私にばかり頭の君はそう怨むような事を  
言つて来られるのだから分らない位である。

そのままその四月も半ばを過ぎた。

四月の末になり、  
<sup>たちばな</sup>橘の花の匂の立ちだした或夜、



だいぶ更けてからだったが、私は自分にいろいろの事を言つてよこされる頭の君を、不本意ながら撫子をそのうちお許しすると御約束した以上はそう素気なくばかりも出来ないので、ともかくもお通しさせる事にした。頭の君はこんどは、前とは打つて變つて、重々しい態度をして入らしたが、二人ぎりになったとき私に向つて言い出された事は、しかしいつもと少しも變らない怨み言だった。あんまりその事ばかり繰り返して仰おつしやるものだから、反つてしまひにはその仰おつしやつてゐる事に最初ほどの熱意がないようにさえ——そして只それでもつて私を苦しめなざるためにのみ、それ

を私に向つて繰り返してばかり入らつしやるようにも  
——私には思えたのだつた。

「まあ、何んと思し召して、その事ばかり仰やるので  
しょうね」と私はもうそれを打切らせようとして、「何  
度も申しましたように、まだほんの子供で、どうやら  
まあその八月頃にでもなつたら、ういごと初事もあろうかと心  
待ちにされている位なのですから——」と、そんな事  
まですばりと言つた。

そう私に言われると、さすがに頭の君も二の句を継  
げなそうにしていられたが、

「でも、いくらお小さくとも、物語ぐらいはし合うも

のだと聞いておりますが——」と暫くして言い出された。

「姫はまだそんな事も出来そうもないほど、幼びているのです。誰にでも人見知りをしてしようがない位なのですからね。」

私は簾みすごしに、だんだんしよ稍げたようになって私の言葉聞いていらつしやる頭の君を見透しながら、更らにすげなく言い続けていた。……

「そう仰やられるのをこうして聞いておりますと、只もう胸が一ぱいになってきて溜たまりませぬ」そう言つて、頭の君はどうとう身もだえするようにその場に顔

を伏せた。

「何故、そう私にはつらくおあたりになるのでしょうか。まあ、そうまで仰やられなくとも。——いいえ、もう私はなんだか自分で自分が分かりませぬ。せめて、その簾のなかへでも入れさせていただけましたら……」

だんだん興奮してきながら、何を言っているのだから自分にも分からないような事を言い続けているように見えた頭の君は、そのとき突嗟とつさに——どうしてもそう考えてやったとは思われないほど突嗟に——ずかずかと簾の方に近づいて、それに手をかけそうにせられた。私はそれまでそれを半ば目をつむるようにして聞い

ていたが、いきなりそんな事をせられそうなのに気づくと、思わず後ずさりながら、突嗟にきつとなつて、「まあ、簾に手をおかけになるなんて、何という事をなさいます?」と声を立てた。同時に私はその簾の外側から、それに近づいた頭の君と一しよに縁先きに漂っていたにちがいない橘の花の匂がさつと立つてくるのを認めた。私はその匂を認め出すと、急に自分の心もちに余裕が生じでもしたように、一層きびきびと、「夜更けて、いま頃になると、いつも余所<sup>よそ</sup>ではそんな事をなさるのでしようけれど——」と言い足した。

そういう冷めたい、それなりに何処となく熱の籠<sup>こも</sup>つ

たような私の言葉が、思わず頭の君を、もう手をかけ  
そうにしていた簾から飛びすさらせた。「そんな御あ  
しらいしかなされまいとは夢にも思いませんでした。」  
頭の君は其処に再び顔を伏せながら、「暫くなりと簾  
のなかへ入れていただけたら、只もうそれだけでよろ  
しゅうございましたのに。若しこんな事で御氣色けしきを悪  
くせられたようでしたら、重々お詫わびいたしますから  
——」と詫わびられていた。

私はそういう頭の君に更に更おに圧しかぶせるように「い  
くら私が年をとっていて、私の事を何んともお思いな  
さらずとも、簾の中へ御はいりなさろうというのは、

まあ何んという事です。その位の事が御わかりにならないあなた様でもありますまいに——」と言いつけていたが、そのままその場に居すくまれたようにして入らっしゃる頭の君を見ると、さすがに少しお気の毒になつてきて、それから急に語氣を落すようにしながら、「昼間、内裏うちなどに入らっしゃるようなお積りで、此処にだつて入らっしゃれませんか？」と半ば常談のよう  
に言い足した。

「それではあんまり苦しゅうございましょう」頭かんの君きみは、そういう最後の言葉をもほんの常談として受け取るだけの余裕もないほど、悄しよげ返かえつて、そのままずうつ

と縁の方まですさつて往かれた。さつきの橘たちばなの花の  
匂はそちらから頭の君が簾みすの近くまで持ち込んで来た  
のにちがいがなかった。

私はふと、その一瞬前の何んとも云えず好かった花  
の匂を記憶の中から再びうつとりと蘇よみがえらせていた。  
それがそのまま暫く私を沈黙させていた。

頭の君はそういう私をすっかりもう自分の事を取り  
合おうとはしないのだと御とりになって、「何だかすつ  
かり御気色をお悪くさせてしまいました。もう何も  
仰おつしやつて下さらなければ、私は帰った方がよろしい  
のでしよう。――」



そう言つて、頭の君は、さも私を怨む<sup>うら</sup>ように爪<sup>つま</sup>はじきなどなさりながら、なおしばらく無言で控えて入らしたが、頭の君がそう思いになつて居られるならそれでもいい、と私が更らに物を言わずにいたものだから、とうとう立ち上つて歸つて往かれるらしかつた。

丁度月のない晩だつたから、私は松<sup>まつ</sup>明などお持たせするように言いつけた。しかしそれさえ受け取ろうとなさらずに、頭の君は何かすねたように、橘の花の匂の立ちこめている戸外へお出になつて往かれた。

そうひどく氣もちを拗<sup>こ</sup>じらせたようにしてお歸りに

なつたので、もう当分入らつしやらないかも知れない  
と思つていたが、翌日になると、又頭の君は役所へ出  
がけに道綱のところへいつものように「御一しよに参  
りましょう」と誘いにきた。いそいで道綱が出仕の支  
度をしている間、硯すずりと紙とを乞うて、一筆認したため、そ  
れを私の許もとに持つて来させた。見ると、ひどく震えた  
手跡で、「前生の私にどんな罪過がありましたので、私  
はいまこうも苦しまなければならぬのでしよう。こ  
のままもつと苦しめられるようでしたら、私はとても  
生きておられそうもありません。何処でも私を入れて  
呉れるところがありましたら、山にでも、谷にでも。

——しかし、もう何もいいませぬ」と認められてあつた。

私はそんな頭の君のような若い御方の仰やる苦しみなんぞはお口ほどの事もあるまいと思つたが、それでもそのひどく震えたような手跡を見ると、さすがに胸が一ぱいになって来、いそいで筆を走らせて、「まあ、そんな恐ろしい事を仰やるものではありません。あなた様がお怨みなさるべきは、この私ではないではありませんか。山のことも一向不案内なわたくし、まして谷のことなどは——」と認めて、すぐ持たせてやつた。

それから暫くして、頭の君はいつものように道綱と一つ車で、役所に出かけて往ったようだった。

その夕方、頭の君は再び道綱と同車して帰って来られた。そうして私のところへ又、何かお認めになって寄こされた。こんどは見違えるばかり鮮な手跡で、「けさほどはたいへん取り乱した事を申し上げて恐れ入りました。仰せ下さいました事、しみじみ胸に沁しみみました。私はきようは本当に生れ変ったような気がいたしました。これからは、もっと気をしっかりと持つて、殿の仰せどおりにお待ちいたす決心をいたしました。只、それまでは他に何んのなす事もなく、無聊ぶりようで

ありまする故、どうぞ縁の端にでもおりおり坐らせて置いて下さいませんか」と書かれていた。

まあ、そう急に神妙なお氣もちになられたつてそれがいつまで続くことやら。そうも思われたものだから、ともかくも今後を見ていようという気で、私はそれには差しさわりのないような返事しか差し上げなかった。その夜は頭の君もすぐお帰りになられたらしかった。

そんな事があつてから暫くは、頭の君も何かと遠慮がちになされて、私達のところへも余りお立ち寄りにはならなくなつた。只隙ひまさえあれば、道綱を呼びにお

寄こしになって、別に為事しごともないのにいつまでもお手  
放しにならなかつた。それにはさすがの道綱も殆ど  
困っているらしかつた。

私も私で、撫子などを相手に、再び昔に返つたよう  
な無聊な日々を迎え出していた。昔に返つたような？

——しかし、それらの日々は私にとっては、前よりか  
もつと無聊で、もつと重くろしいところのあるのを認  
めない訣わけにはいかなかつた。私はそれをば撫子にも話  
して置かなければならない事をまだ話していかないこと  
の所為せいにしていた。どうせいつか話さなければならな  
いのなら——と思ひながらも、撫子のまだ余りに子供

じみた身体つきや、もううすうす頭の君の求婚の事を  
勘づいていて、私からそれを聞かされるのをそれとな  
く避けているとしか思えない折々の差かしはずそうな様子  
だのを見ると、私にはどうしてもその話が持ち出せな  
いのだった。

そういう撫子の差かしそうな姿が気になってならな  
い時など、どうかして縁の方から橘の花の重たい匂が  
立って来たりすると、いつかその簾のそとに打ち萎れしお  
ていた、若い頭の君の艶な姿が、ふいと私には苦しい  
ほどはつきりとおもかけ俤に立ったりするのだった。……

そんな或日の事、思いがけず道綱が殿の久しく絶えていた御消息を私のところに持つて来た。何事かと思つて、私はいそいで披ひらいて見た。「この頃よく右馬頭うまのかみがそちらへ参るそうな。八月まで待たせなさいと言つてあるのに。人の噂によると、なんでもお前が右馬頭を派手にもてなしてやつているそうではないか。お前に会えるのだつたら、怨みの一言も言つてやりたいものだ」

その消息を手にしたまま、余りの事にしばらく私は空うつけたようにさえなつていた。こんな事を、あの氣位の高い殿がよくもまあ私になど仰やつて来られたもの



だ。事もあるうに、あんなお若い頭の君のことで私をお疑ぐりなさるなんて。——そう思うと、何より先きに、ひとりでに苦笑とも冷笑ともつかないようなものが私の胸の裡うちにおさえ兼ねたように込み上げて来た。その一方、何とも云えず悔やしいような気もちもしないではいられなかった。……

そうやってその消息を手から離しもしないで、しばらく空けたようになっていた私は、やっと気を変えて、ともかくも早速殿に何んとか返事を差し上げなければならぬと思った。が、何を書いても、誰が誰に向つて書いても同じような弁疏いいわけめいた事しか書けそうな

かった。そんな事位でこちらの心をお疑ぐりになるのを反って殿にお怨み申したい——そう自分でありたいと思うような気もちには、しかしどうしても今の私はなれなくなっていた。自分の心が既に殿からはこんなにも離れてしまっているのかと思つて、私はみずから驚いた位だった。

私はそのまま悔やしそうに、その殿の手紙の裏に何んと云うこともなしに散らし書きをし出していた。こういう今の自分の何もかもを引括ひっくるめて自嘲したいような気もちにしかねずに。——

いまさらにいかなる駒かなつくべき

すさめぬ草とのがれにし身を

私は殿には返事を差し上げる代りに、そんな歌だけ書いてお送りする事にした。それを道綱に持たせてやった後も、しかし私はいつまでも自分の裡に何物に對するともつかない、果てしない不満のようなものが残っているのをどうしようもなかった。

頭の君はこの頃も相変らず、何かと言つては道綱を呼びに寄こしたり、又遠慮がちに道綱のところ<sup>か</sup>に御自身でも入らしつたりなすっているらしい。頭<sup>かん</sup>の君はこ<sup>きみ</sup>

んどの事は何も御存知ないのだから、別にかれこれ言うこともないので、私はそのまま勝手にさせておいた。そのうち五月になった。時鳥ほととぎすがいつになくよく啼ないた。昼間からこんなに啼くことも珍らしい。廁かわやにはいつていて、ほととぎすの啼き声を聞くのは悪い前兆だといって昔から人々が忌むらしいが、私は屢しばしばそれをすら空うけたように聞くがままになっていた。……

いつか世の中は長雨ながさめにはいり出していた。十日たつても、二十日たつても、それは小止おやみもなしに降りつづいていた。

或夜など、雨のためにひさしく音信おとずれのなかった頭の

君から突然道綱の許もとに「雨が小止おやみになったら、ちよつ

と入らして下さい、是非お会いしたい事があります

から。どうぞお母あ様には、自分の宿世すくせが思い知られ

ました故何も申し上げませぬ、とお言付ください」な

どと、何を思つたのか、書いて寄こされた。——そこ

で道綱が何やら気になるような様子で、雨の中をわざ

わざ訪ねてゆくと、別に何の用事もなかったらしく、

ただ頭の君に人懐きそうにもてなされ、女絵など一

しよに見ながら常談を言い合つて、夜遅く再び雨に濡

れて歸つて来た。

撫子の方も撫子で、この頃は何か鬱ふさいだようになっている。日ねもす、閉じ籠こもったまま、琴などを物憂そうに搔き撫でたり、そうかと思うと急に止めたりして、少しいらいらしたようにして暮らしている。——こういう物忌ものいみがちな長雨頃の、そういう若い人達の、何処へも持つてゆき場のない、じつとしていたくともじつとしていられないような気もちは私にもよく分かつていた。そればかりではなかった。私は絶えてここ数年というもの感じたことのなかった、そういう何処へも持つてゆき場のないような気もちを、撫子なんぞのために思いがけず蘇よみがえらされたようで、——しかし、今

の私にはその昔日の堪え難さそのものさえ、それと一しよにそれが自分の裡うちに蘇らせるもののためにか、反つて不思議になつかしい氣のするものだった。私はそういう心もちに誘われるがまま、一人きりで端近くに出ては、雨にけぶった植込みなどをぼんやりと見入っていたりする事が多かった。まだ殿もお通いにならなかったような若い頃、よく自分がそうやっていたように……

そんな長雨のつづいている間の、すこし晴れて、どこことなく薄月のさしているような晩だった。

きようはひさしぶりの雨間に、さつきから頭の君が道綱のところに来ていられたようだったが、そのうち知らない間に一人でこちらへ入らしつてしまわれた。そうしていつもの縁の端に坐られて、例の撫子の事、いつまでもこうして一人でいなければならぬ苦しさななどを、何かと私にお訴えになり出した。「もうあとみつきの三月ばかりなど、すぐ立つてしましましょう」私はいつもの冷やかな、突っ放すような調子で言った。

「それが反って中途半端で、この頃私にはますます苦しいのでございます」頭の君はそれには構わずに、自分の言おうとする事は押し切つても言つてしまわれよ



うとするように言い続けられた。「御約束下さった日は、あともう三月と申せば、向うに見えて居るも同然なものではございますが、それでいてこのまま只今のように空しく待たされて居りますと、どうもそれに一日一日と近づいて往かねばならぬのがいかにも緩まだるく、もどかしくて、反ってそれに近づけば近づくほどその日が遠のくように思われてなりませぬ。もういいよと言うところまで待っても、私はそのとき自分がいかににもならない堪たまえ難さのためにどうかしてしまいはせぬかと不安で溜たまらないのです。どうか私からその不安を取り除くように、何とかお計らい下さいませ

んでしようか」だんだん哀訴するような調子になって来ていた。

そうなればなるほど、私はますます取り合わないように、「まさか私に殿の御曆の中を裁ち切<sup>たき</sup>って、すぐ八月が出るように、つないでくれと仰<sup>おつし</sup>やるのではないでしょうね？」と思わず笑いを立てながら言ったりした。

頭の君はしかし、にこりともなさらずに、簾<sup>みす</sup>の方をじつと見つめて入らした。そのため、私はその簾の中に自分の立てた笑いがいつまでも空虚<sup>うつろ</sup>にひびいているような気もちになったほどだった。私はそのときふ

いと殿の御手紙の事を思い出しながら、「それは御無理な事です。それに、この頃は殿にもこちらから御催促しにくいような事情になりました……」

「それは又、どうなすつたのですか？」頭の君は心もち縁からいざり寄られた。

これはまだ言うのではなかった、と思つたけれど、私はすぐ又、そう、いつそ此事は早くお知らせしていた方がよくはないかしら、とも思い直して見るのだつた。しかし自分の口からはさすがに言い出しにくいので、その殿から寄こされた御文をそのまま、頭の君にお見せしたくないところだけ破り取つて、「これ

を御覧なすつて下さいまし。御目にかけてもしようのないものですけれど、まあ、これで殿に催促しにくい訣<sup>わけ</sup>がお分かりになるでしょうから——」と言いながら、簾の下から差し出した。

頭の君はそれを手にせられると、ずうつと縁の先まで滑り出して往かれて、微<sup>かす</sup>かに差している月あかりにすかしながら、それをいつまでも見入つていられた。

そうやってながいこと見て入らした後、頭の君は何やら口籠りながらそれを簾の下から、こちらへ差し入れられた。それから漸<sup>や</sup>つと聞えるか聞えないほどの声で、「御料紙の色さえわかり兼ねます位で、折角なが

ら何んとも読めませんでした」と言つて、再び縁の方へすさつて往かれた。

私は頭の君に巧みにすかされたような気がして、「いえ、こんなものはもう破いてしまえますから——」と悔やしそうに言つたものの、しかしそれにはすぐに手を出そうともしなかった。

頭の君が縁の方から再び言われた。「どうぞお破りにだけはならないで下さいまし。昼間、もう一度、拝見させて戴きとうございます」何処までもそれが読めなかつたような御様子をなさろうとして入らつしやるらしかった。それからそのまま頭の君は無言でお控え

になっておられるかと思つていたら、一人で何を口ずさんで入らつしやるのだから分らないような事を口ずさんで入らした。……

「あすは役所の方へは助の君に代りに往つていただきたい、私はこちらへもう一度、それを拝見に参りますから——」頭の君がそう言い残されて、其処を立ち去つて往かれたのは、それから間もなくの事だった。

その跡で、私は半ば氣の抜けたように、その簾の下に差し入れられたままになっている殿の御文を破ろうとするのでもなく、手に取つて見ると、まあ何とした事か、私は頭の君に御目にかけてくなくと思つて

破ったところを反対にあの方に御目にかけてしまっていたのだった。その上、誤って御目にかけた紙の端が半分ほど更に引きもがれているのに気がついた。私にはすぐ、あの薄月の微かに差している縁先きで頭の君が帰りぎわに何かしきりに口ずさまれて入らした姿が思い出された。

私はその頭の君に見られた紙片の丁度裏あたりに、あのとき自分で自分を嘲<sup>あざ</sup>けるように一ぱいに散らし書きをしたままであったのを、それまで忘れともなく忘れていたのだった。——「いまさらにいかなる駒かなつくべき……」

私はふと口を衝いて出たその文句が自分の胸を一ぱいにするがままにさせながら、なぜか知ら、撫子の悲しい目ざしを空に浮べ出していた。いまにも私に物を言いかけそうにして、しかしすぐに何んにも言うまいと諦めてしまうような、撫子のしおらしい目ざしが、それまでついぞそんな事はなかったのに、その夜にかぎって私の目のあたりからいつまでも離れなかった。

## その四



その翌朝、頭かんの君は道綱のところへ使いの者に、風邪気味で役所へ出られそうもありませんから一寸お出がけにでもお立ち寄り下さい、とことづけて来させた。ゆうべの出来事を少しも知らない道綱は、又例の事かと思つたらしく、いつまでも出仕しゅつしの支度をぐずぐずしている、再び使いの者が来て、お待ち兼ねのようですからどうぞ早く入らして下さいませ、としきりに催促しているらしかつた。何んの用があるのか分からなかつたけれど、何か私にも気がかりでない事もなかつた。

が、そのとき頭の君は私の方へも別に御文を持って  
よこされたのだった。披ひらいて見ると、「風邪気味で、折  
角ゆうべ御約束したものを拝見に伺えず、なんとも残  
念でなりませぬ。私なんぞには忬そんたく度いたし兼ねます事  
ながら、何か殿にわざと御催促なさりにくいような御  
事情がおりなさいまするなら、然るべき折を見てな  
りと、よいように御取りなし下さいまし。此日頃、わ  
れとわが身が不安になるほど何が何やら分からず思い  
乱れておるような私の気もちをも御推量下すつて」と  
いつもに似ず乱雑な、読みにくいほどな手跡で、認したため  
られてあつた。

私はいろいろ考えあぐねた末、それに対する返事はそのまま出さずに置いた。

しかし、あくる日になってから、矢つ張それぎり返事を差し上げないのは、反つてこちらで何んだかこだわっているようで、若々しい遣り方<sup>やかた</sup>ではないかと私は考え直して、いかにも何気なさそうに返事をすることにした。「きのうはこちらに物忌<sup>ものいみ</sup>などいたす者がございました、御返事もつい書けずにしまいました。その事をどうぞ川水の淀み<sup>よど</sup>でもしたかのように、心あつてかなんぞとはお思いにならないで下さいまし。殿へは

こちらからは使いをやるよすがさえ無いのが、御存知のとおり、今のわたくしの果敢はかない身の上。——御文の紙のいろは、昼間御覧なすつても、同じようにおぼつか覚束のうございましょうとも」

夕方、その文を頭の君の許へ届けに往つた使いの者は、先方に法師姿をしたものがおおぜい集つてごつた返していたので、只、それを置いて参りましたと言つて戻つて来た。

まだ風邪気味で寐ねていらつしやるらしい頭の君から「きのうは法師共がおおぜい参つておりました上、日も暮れてからお使いの方が見えられましたので——」

などと言いわけがましく書いてよこされたのは、その翌日になつてからだつた。「——ここ数日、どうしたのか私の庭を離れず、一羽のほととぎすが卵うの花の蔭はななどでしきりに啼なき立たてておりますが、こうして日ごと一人きりで歎なげき明かしてばかりおる私にすっかりなつきでもしたと見えます。

なげきつつ明し暮らせばほととぎす

この卵の花のかげに啼きつつ

まあ、一体、私はこのほととぎすと共にどうなるこ

とでしようか知ら」

いかにも何事もなげながら、どことなくお心のうめきをお洩らしになって入らつしやる、そのような御文を読み返しているうちに、私はつい知らず識らずの裡うちに、苦しんでいるのが相手の方であるときいつも自分の内をひとりでに充たしてくる、一種言うに言われぬ安らかさを味い出している自分自身を見出さずにはいられなかった。……

それから数日後、突然、おじ君にあたられる左京頭さきようのかみがお亡くなりになられたので、頭の君もその喪に服せねばならなくなり、殿の御約束せられた八月を前にし

て、私共に心を残されながら、しばらくその病後の御身を山寺へお籠こもりになられ出した。山からは、最初のうちは絶えず御消息をおよこしになられた。それは相変らず独居の淋しさと撫子を求める切なる希ねがいと充たされていた。しかし私はその頭の君の御文のなかの独居の淋しさをお訴えなさる御言葉がなんとも言えず切実に身にしみて覚えられれば覚えられるほど、一方、撫子をお求めになられる同じ文中の御言葉が、なぜか知ら、いよいよ空疎なものに見えて来るのに気がつかないわけには往かなかった。恐らくそれにはただ私だけが気がついているのだという事も自分には分かつて

いた。それが一層私を身じろぎもできないような苦し  
い心もちにさせていた。そのうちにそんな頭の君の御  
文がだんだん途絶えがちになって来るようなのに、私  
が気がつくかつかないうちに、突然、それが絶えてし  
まった。絶えてから、私ははじめてこうなるだろう事  
を前から何んとはなしに予知していたような気さえし  
たのだった。しかし頭の君が山を下りられたらしいお  
噂はついぞまだ聞かなかった。

.....



私は此日記を仕舞わないうちに、もう一言附け加えておきたいと思う。左京頭の喪のために山に籠られたぎり、そのまま行方知れずのようになられていた頭の君が、実はいつの間にやら他人の妻を偷ぬすまれて何処ぞへこっそりとお姿を暗くらましてしまわれたのであるという事が分かったのは、もう七月もなかばを過ぎてからだ。その事を知った当初は、あまりといえはあまりな出来事に心が擾みだれて、そういう頭の君に対する思いがけない程のはげしい憤りやら、自分のした事に対する悔いやらを感じずにはいられなかったが、漸ようやくいつもの落着いた自分に立ち返った今はもう、何や

ら自分でもわけの分からぬ身の切なさを除いては、私の気もちも割合に静かになっている。

女房たちはそんな私に向つて言うのだった。「もう御約束の日も間近かになっておりましたのに、あれほど御執心なすつて入らした姫君を措おいて、あの方とした事が、まあ何んという事をなすつたのでございましょうね。本当にあまりといえばあんまりな……」私はそういう人々のおなじ繰り返しのような慰めの言葉はどうも無関心に聞き流しているよりしようがなかった。

が、そういう頭の君のこんどの唐突な振舞も、少く

ともいまの私にだけは、そうなさるべくあの方を余儀なくせしめたようなお心の動きの全然分らない事もないような気がする。否、むしろ、もう殆ど手に入られるばかりになっていた撫子をいつまでもあの方に限りなく遠いところにあるかのように思わせ、あの方のお気もちをわざと焦らし抜いて、御自分で御自分がもう何を欲していらつしやるのかさえ見分けられないようにおさせして、とうとうこんな思いがけないような結果にならせてしまったのは、この日頃の私、——  
いつの頃からか男という男のあらゆる運命に対してともすれば皮肉になりがちな、しかもそんな自分を自分

でもどうしようもない、この私の所為<sup>せい</sup>だったのではないだろうか。そんな気にも私はどうかするとなり兼ねないのだった。……

そういう一抹の不安のないこともない私に、道綱が何かそわそわとして黙って一通の文を届けてくれたのは、丁度きのうの事である。まあ、おめずらしい、殿の、と思つたら、それは思いがけず頭の君のだった。しかし、道綱の手前、何気なさそうにして手にとつて見ると、「本当にわれながら浅ましい姿になり果てました。いくら心にもないことだと私が申しまでも、お聞き入れにはなさいますまい。こんなどうしようも

ない羽目にならない先きに、どうしてもう一度なりとあなた様のお目にかかつてしみじみとお語らいしなかったのだろうと、悔やまれてなりませぬ。――」

そのあとに何やら歌のようなものが書かれてあつて、その上が墨で消されてあつた。私はその一部分を辛うじて判読した。「……をしむはきみが名……」

私はつとめて冷めたい顔をしたまま、その紙を徐かしずに巻き出していた。道綱は私の前に据わつたまま、別にその文を見たくもなさそうにしていた。そしてしばらく、二人は何んとも言わずにいた。しかし、そのながい沈黙は、私にとっては、何か心いちめんに張りつ

めていた薄氷<sup>うすらい</sup>がひとりでに干<sup>ひ</sup>われるような、うすら寒い、なんとも云えず切ない気もちのするものだった。

……

底本…「昭和文学全集 第6巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本…「堀辰雄全集 第2巻」筑摩書房

1977（昭和52）年8月30日初版第1刷発行

初出…「文藝春秋」

1939（昭和14）年2月号

初収単行本…「かげろうの日記」創元社

1939（昭和14）年6月3日

※底本の親本の筑摩書房版は創元社版による。

※初出情報は、「堀辰雄全集 第2巻」筑摩書房、19

77（昭和52）年8月30日、解題による。

入力：kompass

校正：松永正敏

2004年2月27日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、  
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで  
す。